

岡本韋庵覚書

有馬卓也

はじめに

幕末明治期に生きた阿波藩の岡本韋庵（一八三九—一九〇四、美馬郡穴吹町三谷村生まれ、名は監輔）は、文化史や人名事典などをひもとけば探検家・教育者・儒学者・破邪論者などと多岐に渡る評価がなされている。これは、彼の業績の多彩さを反映したものと見えよう。⁽¹⁾ 本稿は、かくの如く多岐に渡る岡本の業績の中から、とりわけ樺太経営に関する記録及び中国旅行記を中心に据えて、彼の中国観・ロシア観・韓国観そして日本観を探り、彼の基本的志向の所在を明らかにしようとするものである。

もちろんこの多くの著作を遺す岡本であるから、解明せねばならない問題は数多く存するのだが、岡本の資料はほとんど刊行されておらず、まず翻刻作業を行わねばならない。したがって、本稿では、ここまでに筆者が翻刻したものを中心資料として使用し、現段階に於て明らかとなった彼の思想・志向を考えていくこととしたい。

第1章 思考と志向の基盤

さて、岡本韋庵は『岡本氏自伝』⁽³⁾（以下『自伝』と略記）の冒頭に「余幼より四方の志あり。何とぞして一家の人物たらんと思ひたり」とあり、また幕末から明治初期に於て樺太経営問題を各方面に説いて回っていることなどから推せば、はっきりと自らの考えを主張し、かつ行動するタイプの人物と見て取れる。また「読書は頗る嗜みて、……」ともあつて、勉強にもかかなり励んだようである。もつともこれらは『自伝』の記述であるから、一定の距離を置くべきであり、参考の域を出ない。

第1節 祖父と師

岡本の志向基盤を形成した者の一人に彼の祖父東斎（一七八四—一八六四、名は利之丞）を挙げることができる。彼の性格は概ね祖父を受け継いだものと考えられる。そして彼自身、祖父東斎を指標としていたようで、『自伝』では祖父を次のように述懐している。

「如何にも余は學問は王父に愈りけん。幹局明練の才に至りては、王父が百分の一にも敵すること能はず、余をして王父の風采あらしめば、世人も或は敬服する者もありて、今日の如く寂寞たる境界に沈淪すべきに非るべしと王父を思ふ毎に痛憤せずんば非るなり」(『自伝』)

『自伝』によれば祖父東齋は頼山陽や大塩平八郎などとも交流があり、いわゆる実践的陽明學者であつたらしい。彼の直言実行型の性質は、そういった祖父の影響と考へて大過あるまい。

また岡本は嘉永六年、祖父につれられて岩本贅庵の門下に入るがまもなく絶交。贅庵の教育方針に岡本が反発したことによるが、岡本が後年贅庵に宛てた「贅庵岩本翁に奉るの書」(万延元年)には

「先生自負年長をさしはさんで余を責むるに詩文の末技を以てす。甚だしいかな、其の人を知らざるや。大丈夫、將に四方を経するを以て任と爲す。安んぞ能く終日端座老博士と爲らんや」とあつて、机上の學問ではなく、「四方を経する」ことを志していたことがわかる。當時の志士たちと同様、彼もまた昔ながらの儒學者を「腐儒」「迂儒」として嫌惡する若者の一人であつた。これなどは岡本の志向の一端を伺い知る材料と言えよう。またこの書には當時彼が同學から「真狂生」と呼ばれていた事なども記してある。

絶交後は贅庵の門下で兄弟子にあたる有井進齋(一八三〇〜八九、名は範平)の下に出入りする。進齋については、岡本自身が森重遠撰の『進齋遺稿』(明治三十三年刊)に墓誌銘を寄せているから、その記述をここに紹介したい。

「先生、姓は有井氏、名は範平、進齋と号し、阿波の国徳島の人なり。……業を那波鶴峰に受け、又小出某に従つて算術を修め、其の蘊奥を究む。後、巖本贅庵の門に入り、専ら經史を攻む。……先生は天資眞率、辺幅を修めず、容貌古樸にして、音吐訥渋するも、而も其の中卓然として人に過ぐる者有り。學は程朱を主とし、理を見ること至つて精なり。痛く王氏を排して、余力を遺さず。仏老諸子百家自り伝記小説稗史の類に暨ぶまで、兼綜旁通せざるは無し。善く詩を説き、杜少陵・李義山等の集に於て、發明する所多し。著す所、論語論文・史記標注等有り。……其の官に在るや、恪勤して懈らず、祁寒暑雨と雖も、未だ嘗て一日も休告せず。尤も天倫に厚し。帷を下しし時に方り、寢しきこと甚だし。……唯一龍鬚席のみを存し、坐して書を読んで、自若たり。平居淡薄もて自ら甘んじ、微物と雖も敢て浪費せず。手帕煙袋敝裂するも、尊客と並び坐して、毫も意に介せず。而も厚く貧子弟を撫養し、倍叛する者と雖も、之を絶つに忍びず。善く酒を飲み、酔へば輒ち人を罵る。人或は其の疎狂を議するも、終に大節の間るべき無きなり。……」

この外、『自伝』には「其言を聞くに及びて大いに感服し、朝夕疑義を質問しけるに進齋も余を待つこと甚だ厚く……」とあり、多くを進齋より學んでいたことは疑いない。

第2節 人的つながり

では、岡本が生涯を通じて交流した人物たちに次に目を移してみよう。幕末期に於ては、『自伝』に成島柳北・坂本龍馬・後藤象二郎・安井息軒・雲井龍雄らとの出会いなどが述べられており、幕臣・藩士の枠組みを超えて幅広く交流していたことがわかる。

また明治に入ってから、中央の知識人や政治家・実業家たちと多く交流を持ち、自らを鍊磨洗練していったようである。『自伝』や『清国遊記』などの記述が彼の人的つながりの広さを物語っている。

まず、岡本と同門には芳川顕正があった。彼については『自伝』にも「尋いで又徳島に往き、日々進斎の門に入らせり。当時進斎の門に入る者日に衆く、高橋顕正などいへる英才の士も門下より出づるに至り……高橋顕正とは今の通信大臣芳川君なり」といった記述が見える。

当時の文人・知識人たちとの交流については、『清国遊記』に於ける出発前の壮行会のメンバーから伺い知ることができる。

「麗澤社同人、不忍池の畔の長配亭の樓上に会す。此の会は重野安繹の主盟に係る。会せし者は、安繹、及び蒲生重章・龜谷行・浅見省吾・大畑□□・日下寛・塩谷時敏・山田重光等なり。……」（『清国遊記』明治33年11月3日）

「回瀾社諸人、予の為に筵を赤城八幡の清風亭に張る。会せし者は岡千仞・日下寛・塩谷時敏・秋葉猗堂・浅見省吾・藤田□□・藤波岬・□□□□・置塩□□□□・内田哲太郎等十許人なり。……」（『清国遊記』明治33年11月6日）

この資料には、ともに斯文会設立に参加した重野成斎（薩摩）、『近世偉人伝』の著作で有名な蒲生重章（越後）、『觀光紀遊』や『北游詩草』で知られる岡千仞（仙台）、幕末期には広瀬旭荘に詩文を学び維新後は安井息軒に師事した龜谷省軒（対馬）などの名前が存する。また、この他には当時新聞界で知られていた岸田吟香の名などもある。さらに実業界に目を移せば、次のような人々

が壮行会を催している。

「旧太学法科生、予を亀島坊の偕楽園に饒す。会せし者は、藤波元雄、現は東京地方裁判所部長たり。小川平吉、弁護士たり。宮本平九郎、三井鉱山部総督課長兼大学講師たり。津久井茂、日本銀行文書局第一課長たり。浅見倫太郎、横浜地方裁判所部長たり。手島兵次郎、東京控訴院検事たり。辻秀春、東方地方裁判所予審判事たり。中山孝一、千葉割引銀行取締役たり。宮古啓三郎、弁護士たり」（『清国遊記』明治33年11月14日）

さらに、渡航先の中国に於ては、

「兪曲園先生閣下を訪ね、一書を投ず。曰く、兪大人先生閣下。賤姓は岡本、草字は監輔、日本国徳島県人なり。既に年の隔たること二十六年前、滬に到る。遂に北省を遊歴し、諸処を去来す。上りて左右に候せんと欲するも、果すあたはずして去る。以て遺憾と爲す。今次再遊し、拙著数部の書を刻して、以て諸老生の評を請はんと欲す。……」（『清国遊記』明治34年4月2日）

「嘗て結城琢の杭人蔡元培を拉きて来るに遇ふ。『探源』一を贈る」（『清国遊記』明治34年6月22日）

とあり、兪樸や蔡元培など、所謂清朝考証学の大家とも交流している。そういう意味で彼の交流はかなり幅広い。

第2章 樺太経営

さて、岡本の志向について考える場合、まず言及せねばならないのが、彼がその情熱を傾けた樺太（北蝦夷・奥蝦夷とも）経営問題であろう。彼は幕末から明治初期にかけて樺太経営を通じて

新しい日本の有様を模索していた。彼と樺太との出会いを示す資料が次である。安政二年、彼が一七歳の時である。

「余讚州に遊び藤川三溪翁の塾に食客たりし時、翁が一士人と談ずるを聞くに、曰く「此を距ること一千里の北に一大島ありて「サガレン」といふ。……」といふを聞き、是は如何にも面白き話なりと思ひつきたりき」(『自伝』)

樺太に対して憧憬を懷いた彼は、幕末期に於て数回樺太探検を行い、地の利としての樺太経営の重要性を説く。先に示した「贅庵岩本翁に奉るの書」にも、「四方を経する」一端として

「幕府に奏して都下の遊手之民を率いて蝦夷若しくは小笠原島等に往き徐に辟を墾し、共に地著之民と為り、以て国家の恩に報いんと図らん」

と、その理想を述べている。まだ樺太に足を踏み入れぬ頃の事である。

第1節 樺太渡航と経営

岡本は一八六三(文久3)、一八六四(文久4)、一八六五(六六(慶応元)2)、一八六八(明治元)、一八六九(七一(明治2)4)と、五回の樺太探索を行う。文久三年から明治四年に至る九年間の成果として、彼は『自伝』や『窮北日誌』『開拓事宜』などに於て、以下の如くその利点を述べる。

「余その此(知戸谷間^{シルトコタチ})に住する何の爲めなるやと問ふに、山中に石炭あるを認め、……」(『自伝』)

「北島土壌の膏沃なる物産の殷富なる、真に天然の福地なれば之を開拓して得失相償ふこと能はざるの理あるべからず。……今日の急務は北島に如くはなかるべし」(『自伝』)

「西洋水産家の説に海利は陸田より十七倍なりといふ。我邦の権力をして海外三十里に及ぶものとせば支那に匹敵すべき大國となるべし。志士の深く講究せられたき所に非ずや」(『自伝』)

「地を拓くは耕種に在り。必しも捕魚のみならじ。漁業は時として窮するも、耕種は真に無尽蔵なり、国家もし数千金^ちを抛ち余をして恣に鷺毛^{ロモ}河源なる膏沃の土に耕さしめば、五年を出でずして成功を見んものと思はれけり」(『自伝』)

「況や到处に良材石炭など多く沿海に鯨鯢の出没するもの幾万数なるを知らず。諸般の魚類海獣など枚挙すべからざるに於てをや。安ぞ輕しく外人に附すべきものならんや」(『自伝』)

石炭をはじめ、肥沃な土壌に産する豊富な物産、及び水産の利すべてに恵まれたこの樺太を岡本は「天然の福地」と呼び、そして政府が資金を出せば、五年以内に樺太は本土に対して大いなる助けとなるであろう事を、そして日本が中国に匹敵すべき大國となるであろう事を確信している。加えて「安ぞ輕しく外人に附すべきものならんや」の語が、彼の樺太に対する思いの強さを示している。慶応二年、岡本は函館奉行杉浦兵庫守に北地開発についての意見書を提出する。やや長きに渡るが、可能な限りその全容を以下に提示する。

「此時に北島の急務を論じたる愚見の一通を指出したる事あり。其の文は分つて五段とせり。

其一に曰く北蝦夷島一円に皇國の固有たるは、漢土人も古より認知したる所にて、山海経に北倭起于黒竜江口と見え、朝鮮の由叔舟も皇國の疆域を起于黒竜江之北といへり。先年の御談判に西岸は幌子谷^{ホコシ}を限り東岸は盤香^{タウマ}に止り五十度もて経界を定め

たまはんとせしは、一時の権宜なるべし。

彼地を柯太島と呼べるは皇国よりの称にて奥地夷民の歌謡にも唱ふるほどなれば、露国にサガレインといふは、土人ども曾て耳かざる所なり。……況や夷中には本邦古語も存し、幣をヌサ又ハイナホなど称する類、多きをや。風俗も全く我が上世の遺風たり。是は紛れなく祖宗の遺民たる証なり。……

其二に曰く露人の北蝦夷島に来るもの年を逐て漸く多し。痛憤の至に堪へず。……露人は英仏を恐ると称すれども全島を佔有したき趣にて南端のみを経略するを見れば名を英仏に托し、実は本邦の強弱を卜するに外ならず。今日の急務は是非とも大藩に割渡し便宜もて警衛せしめ務めて多人数を徒し勝手に事業を営ましめんに如かじ。北地を評して漁業の外に国益なしなどいふは国土の宝たるを夢にだも知らざる白痴漢たるのみならず、実に天下の罪魁と想はれぬ。……

其三に曰く久春内滞在の魯人ども已に二百余人に及び、奥地本所には三百人もあるべし。向後に渡来するものに多からんには、奥地も終に彼がため繁華の地となり、蝦夷ども望みを皇国に絶つに至らん。国が十分なるも経略の名義を失はんとす。

今日の急務は奥地を開拓するに如くはなかるべし。……

某が廻浦の節も皇国人と承知したるものは乾魚草実など、種々に齎らし来り贈らるれども、露人は毎々暴行ありて夷ども申合せ殺害したる事などあり。露人と認めては戸を閉ざし避匿するに至り、彼は我が種類に非ずとの説を主張し、一心に皇国に依頼せる情実なるは、度外視しがたきものと存じ奉つるなり。

天時に就て言はんにも、昔時は寒氣凝固する事甚しく地震雷電

など覚えざりしに、近年は時々雷震を覚え、久春内など嚴寒にして凌ぎがたき風評あり。曾て燕雀類を見ざりしも、四五年來は乳燕も見え、雀も漸く夥しといふ。鵜城は久春内の北三十里許に在れども、年中の氣候は松前に均しとて、同処に越年せしもの話あり。皇国人の競ひて彼地に赴かんとする勢なるに之を利導したまふに至らざるは、窃に解せざる所なり。……安ぞ一時の小勞を憚りて、万世の大計を遺るべけんや。

北地の事は英仏等も掛念せらるる所なりと承りぬ。経界の説は万国公論に従ふも可ならん。苟くも土人仰慕の情実を問はず。土地要害の如何を顧みず。俄に経界を定むるに至らば、南島も或は名義を失ふに至らん、南北同一種の遺民なればなり。

其四に曰く北蝦夷島一円に皇国の領分たるは荷蘭人の地図にて既に分明なり。先儒の説に半島已北を支那に属すと説かれたるは、何の考もなく一説あるままに書したるなれど、実は島国第一の罪民にて其書は一切焼棄したく存ずるなり。今日露人に接する名義は幾等もあるべし。……

土人風俗の奥羽と同一なるは言ふまでもなく、言語も奥羽地方には今に至るまで夷語の存するもの多し。……

五十度経界の説は、国中に不服のもの多き所なれば、国人とせざる説を以て、魯人に談判し、敵国外患あるを幸とし、国中の人心を鼓舞し国勢の回復するに至るまでは、姑く因循に附するも可ならん。務めて多人数を移して、地利を興し、魯人の我に害を加ふるを見れば、赤手もて捍禦し大義を万国に貫徹せしむるやうあらまほしき事なり。

其五に曰く魯人が常に垂涎する所は久春古丹に在り。久春古丹

は全島第一の良港にて彼地に割拠するときには南方に向ひて侵略するの基本も立つべきがため、鰐城（ワシキ）敷香（シウカ）は全島胸腹の地たるにも構はず、専ら南方を経略すと見えたり。……」（『自伝』）

金沢治氏は「岡本韋庵先生の家系と年譜」⁽¹⁹⁾の中で、この意見書の要点を次の五つにまとめておられる。（一）樺太島は日本領であることを典籍と言語風俗によつて考証断定する。（二）現地の地勢・風土・産業・港湾・河川等を詳述する。（三）移民は決して至難のことではないことを建言する。（四）露人侵略の現状を報告する。（五）我国のとるべき態度としては一日も早く移民を送り、移民の進出によつて実績を示せ。その実績を根拠に境界を決定せよ。それまでは交渉に應ずるな。

そして樺太の重要性は『窮北日誌』でも次のように説かれる。

「余の柯太に赴くや、將に全島の形勢を探りて、国家の大計を陳べんとするなり」（『窮北日誌』）

「今や皇運復古、業、前世を超越るに、柯太未だ開けず。豈に国家の一大関典に非ずや」（『窮北日誌』）

この文を見れば、岡本の樺太経営論が、日本経営論と最終的には結びつくものであったことがわかる。

安政元年、日本はロシアと日露和親条約を結び、そこで樺太は日露両国民雑居の地となる。にもかかわらず、ロシアは南下政策を推進し、樺太に於ける日本の立場は風前の灯火であった。加えて、対馬へ触手をのばそうとした一件もある。それらを受けてのこの意見書であり、また明治以降、ロシアの樺太に於ける活動はさらに活発化し、それに対する『窮北日誌』『開拓事宜』なのである。

第2節 樺太経営の夢の破綻

経営場としての樺太の利点に着目した彼は、幕末期に於ては成島柳北や坂本龍馬などを通じてその重要性を主張する。慶応三年のことである。

「露人に接するの急務は柯太に如くはなし。柯太を回復せんとならば奥地を開拓し、大に漁業等を興すべきなりと。……薩人堀清之丞が来るに会ひ、土州人坂本龍馬が海援隊を率いて長崎に在りといふを聞き、往て之に説き、共に北地のため尽力せんとす」（『自伝』）

が、幕末維新时期という変動期であつたが為に見送りを余儀なくせられる。

「象次郎（ゾウジロウ）良馬も大に然りとしたりしが内地危急なる勢なれば足下説をすべしといへども、直に北島に着手する事を得ず」（『自伝』）

彼が成島柳北の食客であつた時、彼に北方経営の急を説いてはいるが、成島は意見書の末尾部に「方今の急務といふは外になし、飲んで小便、食べてくそせん」（『自伝』）と記して岡本に返却している。成島に言わせれば結局は書生論、或いは時期尚早ということであつたのかもしれない。また維新後、大久保利通や岩倉具視あたりに進言し続けるが、岡本の進言に具体性が伴わなかつたということもあり、遅々として樺太経営の話は進まない。副島種臣などの理解者もいたが、日本は琉球問題・征韓論論争・台湾出兵へと進み、明治八年の樺太・千島交換条約に至つて樺太はロシア領となり、結局岡本の樺太経営は夢と終わる。

このことは挫折として岡本に大いなる影を残すこととなり、後

の述懐に於ても彼をして以下のようにその無念さを語らせることとなる。中国渡航中、体をこわした際の記述である。

「瘡^{かさ}熱して痛苦すること甚し。……余嘗て蝦夷に居り、備^もさに艱難を嘗めしかども、未だ曾て身に害あらず。健康なること人の如し。中土に來りしより、始に不食を患へ、繼で感冒を患へ、繼で毒瘡を患へて、病なき日あらず。精力の漸く衰ふるがためなるべけれども、起居飲食の牀に適應ざるもの多きに居る。未だ平王の壮勇を待むべからず。因て前日の事を追思して已まず。一心に思へらく、苟も余をして東北の任に堪へしめんには、朝廷必ず余が言を用て彼地を開拓せん。今日征台湾の兵みな蝦夷に往て、数百万の金糧も決して外に漏れじ。東北既に開け、民各其所を得て、後に台湾を図るも、恐くば遅しとせざるか。今聞く柯太の民、数十年來、米粒の撫育に離れて嘆じ、忽ち飢死に至り、魯人のため陵轢せられんことを患へて、官吏の土地を舍つることを嘆じ、從來彼地に官たるものは、其情の憐むべきを見ながら、救ふこと能はず。流涕して別を告げしとぞ。豈悲しからずや。人の柯太に移る始は死せるものありしかども、未だ台湾の甚しきに至らず。今地氣漸く開け、死するもの極て少きに至りて、俄に之を捨てんとは真に惜しむべきの甚だしきなり」(『烟台日誌』10月25日)

琉球問題に端を発する台湾出兵の際、日本軍はマラリアや風土病などで戦死者よりも多い死者を出した。そういったことも踏まえてであろう、台湾や中国大陸の条件の悪さを実体験したこと、またロシアにみすみす「天然の福地」樺太を渡してしまったことへの無念さが、「魯人のため陵轢せられんことを患へて、官吏の

土地を舍つることを嘆じ」「俄に之を捨てんとは真に惜しむべきの甚だしきなり」といった記述から了解せられる。

また、これとはほぼ同じ時期、「郵便報知新聞」への投書も見られる。当該の投書は「日本政府は無慈悲無愛と見做す可き説」という題で、明治7年12月3日付「東京日々新聞」掲載の「外交小言第六」に「此樺太島は我邦に於て利益なし。之を魯國に与ふべし」「吾曹は此島の取手に関らずと思惟したるなり」などあることへの反駁である。

「八十余州三千万人、涕泣声を飲み口敢て言はずして、心敢て怒る者は、唐太の地は我に於て益無し、如かず割て以て魯に与へんにはの一語なり。嗚呼情なや、日本政府。嗚呼情なや、太政官。北海道に住して我が政に服し、我が制を喜ぶ二千余人の男女は、曾て我々の同胞兄弟に非ずとするか」(『郵便報知新聞』明治7年12月22日)

「カラフト漁利数万の地、殊に馴服奉受二千余人の我が同胞兄弟を把て、之を他國に附して疑はず」(『郵便報知新聞』明治7年12月22日)

「日本の板図なる事、判然たる土地人民を挙て、之を魯に附与せんと謀る、誤謬の甚しき論説を自慢らしく世上に公布して更に忌憚なく、……」(『郵便報知新聞』明治7年12月22日)

投稿者「東洋航客」と岡本の関係については、稿を改めて詳細に論じるが、ここに見える日本政府への怨嗟は、翌9年に出版された佐田白茅「樺太評論」などとあわせ考えれば、これをごく一部の声とは見なし難い。

第3章 東アジアへの視角

樺太経営の夢絶たれた岡本は中国へその関心の矛先を向ける。

詳細は今後の研究を待たねばならないが、それは樺太経営が無理なら台湾経営・中国経営と考える彼の必然的帰着点であった。また当時の日本の状況もそうであった。これは「北島なければ是れ南島なく、南島なければ是れ中国なきなり」（「開拓事宜」）という彼の文が如実にそれを示している。

では岡本のロシア・中国・韓国に対する視座は如何なる所にあつたのか。日本経営を考える場合、東アジア諸国への進出を不可欠と判断した彼は、ロシアに対しては日本のアジア経営を脅かすものとしての意識を、中国・韓国に対しては経営対象としての意識を明示する。以下それを示してみよう。

まず樺太探検で得た彼の対ロシア観である。以下の資料がそれにあたる。

「露人が勢の甚だ熾さかんにして我が防禦の策なきは余が尤も苦心したる所なれば……」（『自伝』）

「是は露人が日に盛なる状を目撃して世人に訴へんとするに堪へず」（『自伝』）

「魯、柯太を開く。其の志、柯太に止まらず」（『開拓事宜』）

「其の志、柯太に止まらず」という一文に彼の危機感が読み取ることができよう。

また岡本の次なる指標であつた中国に対しては、渡航中の日記に次のような文が見られる。

「（孔）慶鐘曰く「貴国の王は云々」と。余曰く「我が邦の皇統、

一姓綿々として変ずることなし。中国は古より姓を易ふること多し。是れ聖人の意に非ず。吾が国人評す「千秋万歳の後、中国に君臨すべき者は、必ず至聖の裔ならん」と。今、中国人に見ゆるに、輒ち此を説くべからず。然れども理を以て之を推さば、其の説必ず驗あるものならん」と。慶鐘は微笑して答へず。余又其の子に告げて曰く「今より後、中国の政を為すは、唐虞以来の帝王の裔の上議院、天下の道術ありて志を得ざる者の下議院を互角にして、合衆協同して、斯の民を仁寿の域に躋らしむべし。此れ西洋の実より出づ。古に所謂「郷士庶民に詢る」ものなり」と。又其の西洋の諸大学の講ぜざるべからざるを陳ぶ。耶蘇を防ぐは、聖學を明らかにする在り。宜しく聖裔より發憤すべし。我邦に及びて文化日々に盛とならん。此の国は因循姑息にして、中華を自負するは迂闊なること殊に甚だしきこと等説く。之を聞くこと逆ならず、屢々起敬せり」（『支那遊記』10月29日）

これは、彼が曲阜を訪れた際、孔子の末裔である孔慶鐘との会話の記録である。「中国は古より姓を易ふること多し。是れ聖人の意に非ず」「此の国は因循姑息にして、中華を自負するは迂闊なること殊に甚だし」と言い、また議會制を説いていることなどは、非常に大胆とも思えるが、たとえば岡千仞が李鴻章に対し、中国改革論を提示した（明治17年）ことなどと考え合わせれば、当時の文人・知識人たちの間では、さほどでもあるまい。

これに対し、中国から日本を見た場合については、孔慶鐘が「微笑して答へず」という態度をとった真意を察せられるように、また次の資料が示すように、中国にとっては欧化主義を取る日本は

「洋国の賊」といった批判の対象以外の何ものでもない。

「官隸一人を携へて（洛陽）街中を散歩して行くに、土人の尾して来る者陸続として絶へず。「洋国の賊」と喚ぶ者あり。余之を顧みて且つ行く。乃ち此の言を吐く者なし。一人あり。年十六なるべし。俄に余の傍に出でて笑ひ、且つ人を招き「洋国の賊」と曰ふ。余躍り其の面を打つ。其の人愕然として声を揚げて走り去る。又一人あり。五十歳なるべし。家中に在りて余を見る。走り出でて「洋国の賊」と呼ぶ。余立ちて嗜唾す。其の人恐怖して逃ぐ」（『支那遊記』 11月23日）

「積善曰く「日本人洋服を服す。豈英と戦ひ敗れて英に降るか。美国となるか」余曰く「大日本天皇、善を四方に取る。ただ其長する所を察するのみ。佗あるに非ず。我大日本開闢以来、儼立不羈の国にして、安くんぞ英美諸国に降る理あらんや。日本人の洋服を服するは、日本人の意なり。洋人の知る所に非ざるなり」積善黙然として応ずることなし。余、積善に語りて曰く「試に問ふ、中国は古より文明を以て自負するものなり。而して其外人に誇るに足るものは、果して何事かある」積善曰く「中国は唯善を以て宝とす」曰く「善を以て宝とするは、中国のみならず。四海万国、並びに善を宝とせざるものなし。僕は此等の事を問に非ず。中国は即ち聖賢君子の国なり。則ち其流風遺俗、必ず見るべきものあらん。而して僕これを知らず。故に教を請ふなり」曰く「中国の陋俗は、君此に在ること多日なれば、既に大略を領せん。必しも僕の言説を待たじ」曰く「果して君が説の如くば、中国人未だ文明を以て自負し、醜夷を以て洋人を侮るべからず。人の善あるを択て取るも、亦其所なり」曰く

「中国人未だ文明を以て自負するものあらず。醜夷を以て洋人を侮るは、僕始て君の語を聞けり。早くは未だ聞かず。人の善あるを択て取るは、日本のみならず。中国も亦択て取るなり」曰く「君が言の如くば、僕の論は左なり。然れども中国の人情、恐くは此に至らじ」と。積善乃ち左の字の上に不の字を書せり。蓋し余が言の謙せるがためなり」（『烟台日誌』 10月28日）

ここに「洋国の賊」「英と戦ひ敗れて英に降るか」「外人に誇るに足るものは、果して何事かある」とあるように、中国側の日本への見方は非常にきびしい。

しかし、岡本の対アジア観は矛先を緩めることなく、とりわけ「支那事情」に於ける彼の中国批判はかなりてきびしい。

それは次の資料に示した韓国観と同様、中国・韓国を見下した記述と言わざるを得ない。

「船中の人、我が洋服を咎むるものあり。余曰く「中国人聖賢の服を服せず。吾安んぞ聖賢の服を知て、服することを得ん」と。衆以て応ずることなし。中に一人あり。進て曰く「日本国は何の処に在るや。將た朝鮮が国王は何の姓ぞ。文教風俗は中国と同じきや否や」余曰く「朝鮮は古より日本に服役するものなり。日本の匹敵に非ざるなり。天皇は姓なし。特称して天皇天孫と曰ふのみ。文教に至りては、中国と同じきもの多きに居れり」其人の曰く「国王の冊封は何の代より始まるや。国中に孔子を貴ぶことを知るや」余乃ち大書して曰く「大日本天皇、開闢より今に至るまで、一姓綿々として儼立不羈なり。本は自由・自主・独裁無外の大君主。開闢以来、未だ嘗て人の封冊を受くることあらず。我が祖宗天皇の善を四方に取るは、即是大

舜が善を人と同くするの意なり。國中孔子を貴ばざるには非ず。然れども孔子元帥となり、孟子偏裨となり、以て日本を攻めば、吾儕小人も亦干戈を執て天皇のために先驅すべきなり」其人の曰く「天に二日なく、地に二王なし。果して此説の若くば、日本王、蓋ぞ中国に都せずして、東隅に偏居するや」余曰く「韃靼人何ぞ日本に傲りて、地に二王なしと曰ふことを得ん。多に其量を知らざるを見るなり」と（『烟台日誌』10月30日）この対外（対アジア）意識の基底にあるものは、皇国としての日本に対する過剰なまでの自意識であろう。

では彼にとつての日本とは如何なる国家だったのであるうか。次の文にあるように、彼は皇国としての日本を強く意識し、そして多くをまなでいたようである。

「余幼きとき国史略、日本外史などを讀み、皇室の式微を慨ふことあり」（『自伝』）

「今や皇運復古、業、前世を超ゆるに、柯太未だ開けず。豈に國家の一大闕典に非ずや」（『窮北日誌』）

また第3章に於て提示した各資料の

「我が邦の皇統、一姓綿々として變ずることなし」

「大日本天皇、善を四方に取る。ただ其長する所を察するのみ。佗あるに非ず。我大日本開闢以來、儼立不羈の國にして、安くんぞ英美諸國に降る理あらんや」

「大日本天皇、開闢より今に至るまで、一姓綿々として儼立不羈なり。本是自由・自主・独裁無外の大君主。開闢以來、未だ嘗て人の封冊を受けることあらず。我が祖宗天皇の善を四方に取るは、即是大舜が善を人と同くするの意なり」

なども同様であろう。彼にとつて日本の将来を考えるとすることは、まさに日本經營を媒介とした近隣諸國經營、すなわち「四方の志」に他ならなかった。

おわりに

岡本韋庵について、彼の著書のごく一部しか消化していない現段階では、まとめとして多くを語ることは早計であろう。ここでは岡本韋庵を直接知る者の岡本評をいくつか見ていくことにとどめたい。次の三つは自著に寄せられた序文である。

「嗚呼、國家方今焦眉の急は北蝦に在り。苟も北蝦を失はば、則ち北海道以南は保つあたはず。真に齒寒の憂なり。若し廟堂の此書を觀、若人（岡本韋庵）に任じて開拓撫御の術を尽すを得しめば、則ち広疆雄視の業、魯・英・普・仏諸國をして独り其の盛を擅はしりにせしめざるなり」（『南摩綱紀』『窮北日誌』序）

「此の書、一たび出でて挙げて之に附せば、魯の説て熄きまん。挙げて之を魯に附するの説熄みて、而る後に開拓の業、得て定まるべし。開拓の業、此の書に因りて定まらば、則ち此の一書の有るは、太だ國家に造すなり」（『源元起』『窮北日誌』序）

「嗚呼、監輔の若きは、真に能く國を憂ふと謂ふべし」（『山東一郎』『窮北日誌』叙）

これらは序文であるから、ある程度は割り引きして考える必要があろう。が、「監輔の若きは、真に能く國を憂ふと謂ふべし」という記述はある程度信用できよう。

また木下彪の『明治詩話』¹⁸⁾には、岡本韋庵の『万国史略』についてのコメントを載せる王韜の『扶桑遊記』の引用、及び木下自

身の岡本評が見える。まず王韜の発言を引く部分である。

「岡本監輔来る。……その著に『万国史略』あり、游記に此書を評し且曰ふ「日邦近ごろ西学を尚ぶ。此書其の情偽を著す」と尤も切なり。余謂ふ、西法を倣ふ今日に至り極盛なり、然れども其の実を究むれば猶皮毛に属す、并に学ぶを必せざるに之を学ぶ者あり、断じて学ぶ可からずして之を学ぶ者あり、又其の病は行ふ太だ驟^{はなは}にして之を模する太だ似るに在り。岡本近日又要原類纂^{じわん}を著す、古今言理の諸言に就き、其の要を総じて之を概括す。皆孔孟の遺意なり。彼以為らく、是説や天下に徧^{あま}くして行ふべきなりと。泰西学士の言、則ち之を損す。亦特識を具する者なり」と（木下彪『明治詩話』下）

ここで王韜は当時の西学に偏向する風潮を批判した上で、「古今言理の諸言に就き」「孔孟の遺意」を伝える岡本を「特識」として評価している。そして、これを踏まえて木下は以下のように岡本を表している。

「国を挙げて欧化に趨る時、岡本の如く、西欧の事に通じて而も徳教は独り東洋を重んずべきを知る者を見、その特識を称せるなり。善惡美醜を弁ぜざる極端なる西洋模倣は、我国に急速に物質文明を移植するに功ありしと雖も、その代償としては余りにも高価なる国民精神並びに伝統文化の喪失を致せるは、今日識者の尽く認むる所、王韜岡本等先見の明ありしと謂ふべきか」（木下彪『明治詩話』下）

この資料に象徴的だが、斯文会創設にも明らかな如く、岡本の志向の基層を為していたものは、日本精神の墨守であったように思われる。岡本を考えていく場合、本稿の冒頭に言及したような

探検家・教育者・儒学者としての岡本だけではなく、ここに「国を挙げて欧化に趨る時」「西欧の事に通じて而も徳教は独り東洋を重んずべきを知る者」と評され、「孔孟の遺意」を伝える者と評される一面を見逃すことはできない。当時かまびすしき欧化論争や日本人論争、或いは民選議院設立論争などの枠組みと視座も必要であろう。そして彼は国学洋学の枠組みを超えた、スタンスの広い知識人であったと言えるのではないか。

本稿は多く資料紹介に終始した感があるが、ここに提示した諸問題は今後の課題としておく。

— 註 —

(1) 岡本韋庵に関する資料については、徳島県立図書館におさめられており、「岡本韋庵先生蔵書及原稿目録」によりその全容を知ることができ、明治期刊本の一部を紹介すれば、北方関係として『北蝦夷新誌』『窮北日誌』『北門急務』『千島聞見録』、皇道関係として『祖志』『神道発揮』『皇道鼓吹』、儒学関係として『儒学精彩』『論語正本』『孝経頒解』、思想・啓蒙書として『要原類纂』『鉄腰』『岡本子』、洋学関係として『耶蘇新論』『西学探源』『洋学精彩』などがあり、著作内容が多岐にわたっていることが了解せられよう。

(2) 今回考証の対象とした文献は、刊本としては昭和39年徳島県教育委員会編『岡本氏自伝・窮北日誌』写本（いずれも徳島県立図書館所蔵）としては、『支那遊記』（有馬卓也・真銅正安共訳・徳島大学国語国文学8-10）、『烟台日誌』（有馬沢・徳島大学総合科学部紀要3）、『清国遊記』（有馬沢・徳島大学総合科学部紀要6）、『清国事情』（真銅沢・同志社

国文学 47・48) である。

(3) 『自伝』の記述に通信大臣芳川顕正とあることから、岡本がこれを執筆したのは一八九八年から一九〇四年、すなわち彼の最晩年期であった。芳川顕正の入閣歴は以下の通り。

第1次山県内閣 一八八九・一二―一九九一・四……文部大臣

第2次伊藤内閣 一八九二・八―一九九六・八……司法大臣

第2次松方内閣 一八九六・九―一八九七・一二……司法大臣

第3次伊藤内閣 一八九八・一―一八九八・六……内務大臣

第2次山県内閣 一八九八・一―一九〇〇・九……通信大臣

第1次桂内閣 一九〇一・六―一九〇五・一二……通信大臣

(4) 『大日本人名辞書』(講談社学術文庫)の岡本の記述を見れば「晩年頗る落膽す」とあり、或いは当時既に自他共にそういう認識があったのかもしれない。

(5) 岩本贅庵については、大和武生氏の「近世阿波の学問と儒学者」(渭陽会編『東洋の知識人―士大夫・文人・漢学者―』朋友書店)に解説がある。また岡本の「贅庵岩本翁へ奉るの書」は、注(2)既出の「岡本氏自伝・窮北日誌」二九〇―二九三頁におさめられている。

(6) 「腐儒」「迂儒」などの語については、拙稿「幕末・明治期の漢学者―変動期の知識人研究への視角―」(『東洋の知識人』・註(5)既出)、及び「高杉晋作の詩想―「狂」と「倫生」―」(徳島大学総合科学部紀要5)に於て論じた。参照されたい。

(7) この墓誌銘は竹治貞夫編『阿波碑文続集』(昭和五九年刊・二七八頁)によった。

(8) 雲井龍雄(米沢藩士)については、拙稿「雲井龍雄研究序説」(徳島大学教養部紀要・人文社会28)、「自由民権運動下の雲井龍雄の一側面

(上下)」(徳島大学国語国文学6・7)がある。

(9) 引用文中の□は、原本が空欄であることを示す。

(10) 岡本章庵・森重遠・馬場辰猪・矢野文雄らにより思斉会が成立し、のち岩倉具視・重野成斎・川田剛らの援助により斯文会へと至る。重野成斎は『窮北日誌』に跋文を寄せている。

(11) 引用文中の■は、原本が判読不可能であることを示す。

(12) 「開拓事宜」は『窮北日誌』を出版した際、巻末に付録として掲載されたものである。

(13) 金沢治氏の「岡本章庵先生の家系と年譜」は、註(2)既出の「岡本氏自伝・窮北日誌」の末尾に納められている。

(14) 「外交小言」は明治7年の10月14日・10月17日・10月23日・10月26日・11月5日・11月24日・12月3日の都合七回に渡って掲載された。当時の外交上の諸問題について様々な点から論及している。

(15) 秋月俊幸氏は『日露関係とサハリン島―幕末明治初年の領土問題―』(筑摩書房・二四〇頁)の中で、「東洋航客」というペンネームの投稿者を岡本章庵であると推定しておられる。この投稿者「東洋航客」については、稿を改めて詳しく論じたい。なお、明治7年11月15日付「郵便報知新聞」にも「日本人民は蛆虫に劣る説」という東洋航客の投書が見える。また未確認だが「横浜毎日新聞」にも投書がある。

(16) 明治文化研究会編『明治文化全集』巻25雑史篇(日本評論社)に収められている。「樺太評論」は、注(14)既出の「外交小言第六」を提示した上で、中島雄・笹波津二・南海漁夫・大家祐義・大槻文彦らの賛否両論を併載したもの。

(17) 「支那事情」の目次は以下の通り。一、上海及び其近傍の形勢。二、揚子江の形勢。三、烟台及び其近傍の形勢。四、天津及び其近傍の形勢。

に、加筆・修正したものである。

五、天津以東海岸の形勢。六、營子及び其近傍の形勢。七、浙江福建二省海岸の形勢。八、汕頭及び其近傍の形勢。九、支那土木建築の壮たる景況。一〇、清国地形の大異なる状況。一一支那の諸山。一二支那の古物。一三、清国の官吏に虚銜多き情況。一四、官吏の横奪を恣にする状況。一五、清国兵制の修飾せざる有様。一六、清国兵種の状況。一七、清人の報国の念に乏しき情況。一八、清人の残忍なる情況。一九、清人の誑詐貪婪なる情況。二〇、支那人が虚喝虚飾の情況。二一、支那人の懶惰にして不潔なる情況。二二、支那に盜賊の多き情況。二三、清国の国力余裕ある情況。二四、商法を盛にすべき意見。

(18) 木下彪『明治詩話』下(昭和一八年・文中堂)三三八頁。

(19) 注(15)既出の「日本人民は蛆虫に劣る説」は、民選議院設立を主張する投書である。

――主な参考文献(但し注に提示したものは除く)――

- ・藤井甚太郎『明治文化史第一卷』(洋々社)
- ・毛利敏彦『台湾出兵』(中公新書)
- ・毛利敏彦『大久保利通』(中公新書)
- ・細谷千博『日本の外交』(日本放送出版協会)
- ・町田三郎『明治の漢學者たち』(研文出版)
- ・南博『日本人論』(岩波書店)
- ・田辺太一『幕末外交史』(平凡社東洋文庫)
- ・麓慎一「慶応期における蝦夷地政策と樺太問題」(地方史研究協議会編『北方史の新視座――対外政策と文化――』雄山閣)

*本稿は徳島中国学会(平成10年12月・於徳島大学)に於て発表したもの